

野生と生きた 88年

高橋 清 (29C 応化)



スエーデン 貨客船
「クリスティンバッケ号」

その4：1966年、新しい人生へ

1965年に、来日していたカナダ人の英会話の教師を家に招待し、家庭料理を振る舞いながら、家内と一緒にカナダの話を伺うと、今までただ北の開発途上国と誤解していたカナダは、実はアメリカに劣らない文化国家であることを知った。当時は、まだコンピューターも無く、大方は出版物でしか得られなかった社会の情報の乏しさは、逆に情報に満ちた今の社会より、僕には色々な想像を掻き立てる時代だった。

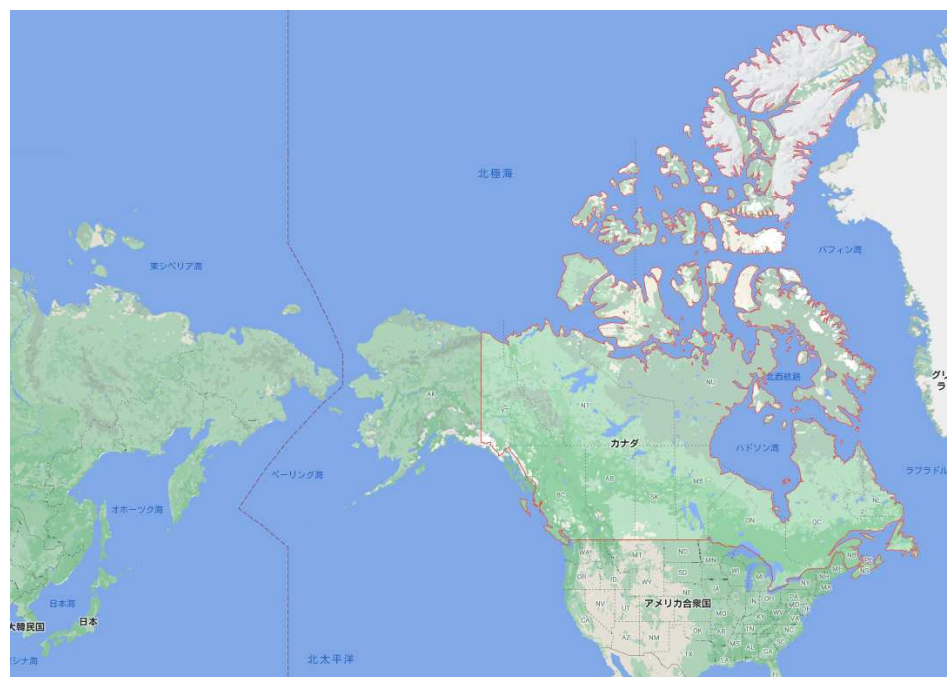
カナダ北辺の北極圏や亜北極圏の3地域は、未開というより野生地で、あとの7州は人口密度は低いものの、アメリカの影響を受けて開発が急速に進んでいて、世界各国から多くの企業が既に進出していた。

それまで、異国でどのような仕事を探すかより、異国で生活して山登りや自然に親しむ散歩など、自分の趣味や願望から日常生活に

近付きたいと考えがちだったが、現実はそのように甘いものではなかった。

スイス、ドイツ、オーストラリアなど、アルプスの山々や大砂漠を何となく夢見ていた自分の甘さに気付いて、将来の安定した生活と、家族の幸せを真剣に考え始めていた。

僕が、海外移住を考えたもう一つの重要な理由は、当時から変化が現れてきた、学童の教育現場だった。日本では、制約が年々増えて、生徒の成績評価には順位がよ



カナダ (赤い線)

り重視され、競争心をあおる教育は、社会の中での「縦割り」制を象徴していることを強く感じていた。元々このことに大きな異論を持っていた僕は、自分の嗜好による、山登りのような教育を行う国の選択よりも、我が子たちにも新しい教育を受けさせたいと考えだしていた。

現職を離れることに対する憂慮、責任の放棄などの葛藤から脱して、自分達の生活向上のための移住と割り切って、計画を進める決心ができたものの、やはり一番気になるのは家族のことだった。

妻は気楽であり心配症でなかったことは幸いだったが、カナダへの移住の決心を告げると、まず「カナダってエスキモー語が中心じゃないの？私何も知らないわ」と言った。実はカナダ原住民は北極圏に近い地域が生活圏で、カナダの言語の主体は英語、そしてモンサント社のあるケベック州はフランス語圏だったが、聴くところによると、英語でも十分通用するとのことだった。妻は英語も話せないが、僕は現地で生活を始めれば自然に慣れてくるものと、あまり心配しなかった。

大方の決心ができて、その年の秋、カナダ大使館に出かけて資料を貰うと、英会話教師の言ったように1966年末まであと1年近くは「技術移住」推進計画が実効していた。そこで直ちに決心し、同計画に従って、まず挑戦したい企業を探し始めた。工業関係の出版物などですでに世界的名声を持っていた「モンサント化学工業(株)」が、カナダのケベック州の首都、モントリ

オールにあることが分かった。

そこで、何はともかく、かなり未熟な履歴書であったが、大使館から聞いた住所に郵送したのである。今にして思うと、何と気楽にして身勝手な行いだっただかもしれない。実は「物は試し」という感じで、どこの馬の骨とも分からない人間に、世界の大手企業から返事が来ることもあまり期待していなかった。ところが、驚いたことに1か月後の年末に「入社を前提とした面接承諾」の通知が来たのには全く驚いた。

この迅速なM社の反応は、逆にかなり先走っていた自分の行動にちょっとブレーキをかける気持ちになったが、とりあえず面接承諾への感謝と「1966年内には渡航の予定」と返信した。そして、少なくとも2、3年はかかることと予測していた渡航の本格的な計画が始まることとなった。その時、技術課長として活躍していた新子会社、「日栄化学工業」に4月を以て退職の予定を通知し、DICの以前の上司にも報告した。このことは、かなりの組織上に影響を与える行動であったため、罰則を受ける覚悟もできていたが、予想に反して、上司から「快拳」として激励を受けたのは嬉しい驚きだった。

春に会社を辞め、暫くは渡航の準備、というよりも海外での生活のための「勉強」に集中することになる。もっとも、勉強と言っても、何度かカナダ大使館を訪問して、係の人から海外生活への注意を受ける程度の情報収集であった。これが、実はほとんど海外生活の準備になっていなかった

ことは、移住後に職を得て、生活が落ち着くまでは気がつかなかった。というより、渡航して気がついた時にはそれまでの準備に関わりなく、ごく自然に現地の日常に溶け込めて行けたことこそ、カナダという自由の国の特色だったと、感謝の気持ちで思う。人間の生活は、基本的には、自分で壁を造らなければ新しい社会に融合することは十分可能であると感じた。



ケベック州の自然

それから36年が過ぎ、58歳で早期退職をして、カナダ政府の主催する「開発途上国の技術支援」の団体に参加した。毎年3か月間に及ぶ途上国での技術支援活動の中でも、何も違和感を持たずに受け入れられた実感である。この支援活動の最中に事故で片目を失ったことなども含めて、カナダでのボランティア活動は改めて紹介する予定だ。

日本社会の中で、貴重な体験をさせて頂いた勤務先（DIC 本社）にお礼とカナダ移住の報告のため出向くと、まず川村社長から一言、「お前をヨーロッパ出張に送ったのは俺の失敗だった！」と、お小言とも思われる強い失望のお言葉を頂いた。まさにヨーロッパ出張が無ければこの決断はできなかったことを強く感じていたので、返す言葉も無く、ただ勝手を詫びたものである。

それから鈴木常務に挨拶をすると、海外をよく知っておられる常務からは、僕の決

断を大変歓迎してくらた。そして、「せっかくカナダに行くのなら、なぜライヒホルドの傍系のカナダ支社に挑戦しないのか」と聞かれ、初めてバンクーバーに RCI の支社があることを知った。上司に紹介をお願いすると、ほどなくして「カナダに到着次第、いつでも面接可」とのありがたい返事もらった。そしてこの会社が僕のカナダでの生涯の勤務先となったのである。

この頃には、日本にいれば、翌春から長女は小学校、次女は幼稚園の歳となっていたので、秋に新学期の始まるカナダに渡るのとは期的にはちょうど良かった。しかし、いきなり渡航して何も言葉を知らない子供が、どうやって小学校に入れるのか、考え及ばないことが最も気になっていた矢先に、海外旅行社からの紹介で、貨客船があることを知ったのである。

貨客船とは、普通の貨物を輸送する船舶で、収容設備に余裕のある場合、乗客数人



出向前、友人家族と

を受け入れる海洋渡航のビジネスである。

貨客船には、時間にかなり余裕のある渡航者が乗ることから、船内では外国人間で交流があることを期待し、「横浜からバンクーバーまで10日の渡航期間は環境整備にもってこいの時間」と、9月末に同船を予約した。「クリスティンバッケ」というスウェーデン船籍であった。

この決断は、「僕たちのカナダ移住を成功に導いた快挙」とすら言いたいほどの大成功であった。乗客数は私たち4名を入れて9名で、アメリカ人の中年夫妻、カナダ人高年夫妻、そしてキリスト教徒のカナダ人女性で、船首の操縦室の下にあるリビングには、いくつかのソファと机が備えら



出向翌日、北海道沖ですでに船は左に傾いていた

れていた。船内では、皆お喋りをしたり本を読んだり、後は限定された範囲の甲板を遊歩していた。ところが、秋のシベリア海から北太平洋の海は荒れていて、横浜を出港して初めてのディナーの席では（もちろん主体は洋食）スープが皿の底に3分の1くらいしか入っていなくても、テーブルが斜めに傾いてこぼれるほど、船が横波を受けていた。そして翌朝には、僕を除いて家族3名ともひどい船酔いで起きられず、他の乗客の半数も船酔いで、朝食の席に着いたのは僕を含め3名だけだった。

北太平洋の冬の荒れた天候も、翌日には皆が慣れて、横浜を出港してから2日目には平常の生活が始まった。

朝食の食堂は、進行方向に向かって左側にあり、長いテーブルの先端席が船長、そして進行方向に沿って決められた席に機関長を加えて5名ずつ、10名が着席して3食を共にする。我が家の家族は4名、食事しながら海を眺められる内側の席を与えられたのだが、2日目に席に着くと、窓の向こうは船が左に大きく傾いて、しぶきを上げる大波しか見えない。食卓には厚い布の



家族皆、船酔いで一日横になる

テーブルクロスが敷かれ、汁物はほとんど無く、コーヒーや紅茶も全て半カップしか入っていない。給仕はすべて中国人で、おそらく料理人もそうだろうと思われた。食事は、一度だけ日本料理だったが、あとは中華料理が多く、皆が食事を楽しんでいた。我々はそれから6日間は同じ景色（海）を見ながらの食事だった。

こうして新しい人生が始まった。

この10日間は何も考えずに楽しむことに決めていたにもかかわらず、荒れる北の海を眺めながら、僕はこれからのカナダでの生活を思案した。やがて他の船客と交流が進み、特に5歳と6歳の娘たちは、暇を持て余し気味の船客の良い話相手となっ



2日目から、子どもたちは船客と交わり始めた

た。皆から英語を教わることとなったのは、我々にとって予想以上の大きな収穫となった。目的地に到着し、下船する時には、娘たちは遊んでくれた乗客にきちんと英語で挨拶ができたのである。（続く）



傾いたまま航行を続ける
船の甲板での遊び



船客は皆、子どもたちとの
接触を楽しんでくれた